
オーガズムは進化する

メイシア マルキュリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーガズムは進化する

【Nコード】

N7016G

【作者名】

メイシア マルキュリア

【あらすじ】

女性の性感はどこまでも深くなってゆくものです限りなく高まってゆく真のオーガズムの世界へ

その1 オーガズムは進化する

女性は何度もオーガズムを感じることができます、その感じる度合いに天井はありません

どこまでも感じる度合いは強く深くなってゆくのです。

もちろんオーガズムの感覚にも個人差はありますが、ですが体を運ぶ練習をしてゆけばオーガズムの感覚は無限に高めてゆけるのです。

女性は感じる肉体を与えられ男性は女性への欲求を天から与えられています

これを自己の満足の為に使うか相手の満足のために使うか

これによってすべての結果が決まるものなのです

本来SEXは魂と肉体を重ね合い合わせる尊い陰陽合アイ一という宇宙の理に従うもので、大宇宙と一つになる尊い業なのです
ですからSEXと言わずにひとつになると言うのがただしいのでしよう

一般的に男性のオーガズムは射精の瞬間にあるとされており
確かにそうかもしれませんがこつとも言えるでしょう

男性は抱いている女性が性の喜びを感じるその肢体を見てその乱れ洩れる声を聞いて満足を感じる

それが男性のオーガズムなのではないでしょうか

ですから感じやすい女性を抱いた時の男性の喜びはひとしおのものなのです。

そして女性のオーガズムを高める為にもっとも大切なことは男性に抱かれているときにオーガズムに達するように自ら身と心を導くこ

となのです

一度いつてさらにいつてさらにさらにいくのです

そうすると一度いつた時よりも二度目

二度いつた時よりも三度目とオーガズムは高まってゆくのです
どこまでもどこまでも女性の体は感じやすくなってゆくのです。

オナニーは女性の性感を育てるためには必要不可欠なのです

女性がオナニーをするときは自然に心も体も気持ちよくなるうとするでしょう。

ですから繰り返すごとに体は感じやすくなり、いく回数が増えてゆくたびにオーガズムは深まってゆくのです。

初めて男性と性を交わした場合でも、オナニーの経験が在るかなし
かでは感じ方に差があることは言うまでもありません。

女性のオーガズムは育てるものなのです
ですから女性のオナニーは蓄あかしなのです。

反対に男性は長く持続するように身体をつくります

挿入から15分そして30分

やがては一時間ともつようにするのです。

男性のオナニーは長く強くもつように鍛える為の業です
ですから男性のオナニーは太刀磨きなのです。

男女がひとつとなり、はじめ女性は7回オーガズムへ達するように
自らの身体を導きます

男性は女性が7回オーガズムへ達するまで運ぶのです。

そしてやがては女性が49回オーガズムへ達するようにします
その後は回数を繰り返した分、女性のオーガズムの感度は敏感さを
増してゆき、身も心もとろけるようになってゆくことでしょう。

体位は女性上位（騎乗位）が良いようです

なぜなら女性が一番美しく見えてお互いが深く交われる体位だからです

そして男性の疲労も少なくお互いの動きを合わせやすいのです。ピストンの運動はさほど必要ではありません。

深く挿入して、ゆりかこのように揺らす運動がよいでしょう。

このようにして女性が、深いオーガズムに導かれてゆきますと女性は大地に根をおろし天に向かって咲き誇る花のように

あらゆる全てに感謝したくなるような心地になられることでしょうそして男性は乱れ咲く花の舞を自らの上に見染めて

すべてをゆだね任せるその姿に大いなる自信と勇気が湧いてくることでありましょう。

私はこの体位を天花の舞テンカノマイと呼んでおります

男性と女性が体を一つに合わせること

本来それは心も一つに合わせるというものなのですが現実にはバラバラなのではないでしょうか

男性は女性を味わい愉しみ

女性は男性から受けるその快感を味わい愉しむ

これではお互い自身の自己満足なのです。

そのままに続けてゆき一定の時間と回数を重ねると心も体も離れるばかりとなるのです、やがて行為はマンネリとなり女性の感度は悪くなり、男性の性力も下がる一方なのです。

世にセックスレスという言葉がありますがこの原因はお互いの自己満足のSEXにあるのです。

本来、人は人に仕え尽くしてはじめて人として存在するものです

それは自己満足ではなく自己以外の相手満足に他なりません

ですから女性は男性の上で49回オーガズムに達して、その乱れ咲く花の舞を男性にお見せすることが自己満足ではなく男性への最高の仕えとなるのです。

中国の素女経に次のようなくだりがございます

男性は一度射精を抑制すると気力が増し二度目は目と耳が明るくなる
三度目は万病が消えて腸が安定する

五度目は血脈が増し六度目は腰が強くなり

七度目は尻と太ももの力が倍になり八度目は生気があふれて輝き

九度目で寿命が延び

十度目で悟り神明に通じる（素女経より）

男性は女性が無限にオーガズムを感じるように運ぶことが女性に尽くすことになります。

男性はやがて生気に満ちて健やかになり神明に通じることになるものを素女経が語るものです。

女性が無限にオーガズムに達して感じてゆくと、女性は美しく若くなりその肌はみずみずしく胸も豊かになることであります。

女性が胸を豊かにしたいと思われるならば、寝るときと目覚めたときの1日2回は蕾開きでオーガズムに達するように自らを運ぶことです。

そのときに乳房への愛撫もお忘れなきように。

その2 ウテルスが開くとき

男性ならば女性を一度でもいかせることが大変に困難なことであることをご存知でしょう

またほとんどの女性が真のオーガズムを経験していないのも現実であります。

いにしえから男性は女性をオーガズムに導くためにありとあらゆる努力をしてこられました

女性をオーガズムへと運ぶには心と体の両面から導くことが大切です。

単に、女性を辱めて、性感を刺激していかせてしまう行為は
嚴重に守られた砦に武力で押し入るようなものなのです
たまさか砦に押し入り占領できたということもあるでしょう
ですが現実にはそれは破壊行為なのです
そのままに回数を重ねれば女性の心と体は破綻をきたし
やがて不感症となり男性を受け入れられなくなつてゆきます
砦は自らの意思によつて開かれて融合調和して、ひとつにならな
ければならないのです。

もとより女性の体は男性に触れられると感じるように出来ております
男性は女性を感じさせるために乳首に触れたり花びらに指を入れて
動かしたり性交したりなさるでしょう

当然女性は気持ち良くなつて声を出したり身悶えたりします
すると男性はもつと女性を感じさせてエクスタシーな状態にするた
めにその行為は強く激しくなつてゆくことでしょう

そして女性はその快感に耐えてゆくのです

いきそうになつてもいかないうちに自然に快感を耐える方へと心と
体が動きます

それは女性が快感を味わつていふという状態でもあります

しかし男性はそれでも女性をいかすためにさらに強く激しい行為と
なり

やがて女性は屈服したように男性の行為による快感の渦に負けてオ
ーガズムに達するのです。

これはあきらかに破壊行為なのです、これを普通の流れだと思われ
るでしょうが大きな思い違いであるのです

この中で最大の問題は女性が快感に耐えるという点なのです
オナニーのときは心地よくなるように運ぶのに、男性にされている
時はいかないうちに我慢しているということです。

人の肉体と心というものは適応性があるということをご存知でしょ
うか

毎日走る練習をすればやがて走る速度が上がり耐久力も増してゆきます

毎日忍耐の練習をすればやがては忍耐強い心となってまいります。このように人の体と心は受ける刺激と繰り返しの回数に分その状態へと適応してゆくのです

これをあてはめて考えてみますと女性が性的刺激を受けて息絶え絶えとなっても、オーガズムに達しないように耐える（味わっている）ということとは、次第に心体は刺激に慣れてゆきソフトな刺激には満足できなくなつてゆきます。

いかにように耐えた分オーガズムにいきずらくなつてゆくのです。結果、せつかく感じやすい体であつたものが不感症へと進むことになるのです。

ゆえにこれを破壊行為というのです

本来女性の心と体はデリケートなものです

感じる心と体が整えばほんのわずかな刺激でもとても感じてゆくようになるものです。

また、女性がオーガズムを感じいる前に男性がいきはてしているとす
るならば

それは性欲のはけ口に男性が女性を利用していることになります。女性が一度オーガズムにいきつくと終わってしまうのであるべく長く快感に身を委ねていようとするならば、それは自らの快感の為に男性をこき使っていることになるのです。

この書のようにしてゆきますと女性はいままでに経験した事のないような快感覚に上りつめてゆき、男性はいまだ見たこともないような女性の悶え狂う姿を見てその感触を感じてゆくことが出来るのです。

そしてある段階を超えてまいりますと更に快感覚の度合いが変わつてゆくのです

それはウテルスが開いてゆくからです

女性のウテルスが降りて男性のシンと重なりひとつになるのです。男性のシンはウテルスに包まれてえもいわれぬ感触を憶え、女性はウテルスに包まれたシンを全身に感じて、かつて経験した事のない感覚に身を悶えさすことになるのです。

ウテルスはドイツ語で子宮のことです

私はウテルスのことをアステイと呼んでいます。

アステイに男性のシンが入るということは普通にはありません。男性のシンが大きく長いからアステイに入るというものでもありません。

なぜならアステイは固く閉ざされていて簡単には男性のシンを受け入れてはくれないからなのです。

ではどのようにしたら良いのでしょうか。それはテクニクではなく継続なのです。継続は力なりと言います。

女性は7回オーガズムを迎えるように自らを導き、男性は女性が7回オーガズムを感じられるように運ぶのです。

そしてやがては49回オーガズムを迎えるようにしてゆきます。

そうして繰り返し続けてゆきますとやがて固く閉ざされていたアステイが開き、自ずとシンを包み込むように下りてくるのです。

それまで根気よく続けることが大切なのです。

*女性の花びらにベビーオイルのようなものを十分に塗り撫でさするといいでしょう、

そして誇張した男性のシンにもベビーオイルを塗ります。

そうするとスムーズに挿入ができます。

体位は天花の舞です。

女性は男性の膝に手をあてて仰け反るような体位をとります。

女性が仰け反るとアステイにシンが入りやすくなるのです
後は7*7=49回、オーガズムに達するようにお互いが努力する
のです

アステイにシンが包まれるようになりますとシンの先はなにかに啜
えられたような感触を憶えます。

そうなれば、男性は女性を抱き寄せるようにして胸がふれあうよう
にしてもよいでしょう、

基本はたったこれだけです、たったこれだけなのですが古今東西
女性が自らオーガズムに達するように運ぶということをいまだして
いなかったのです。

男性は言葉で女性を導くことも大切です、女性の耳朶にキスをしな
がら囁く男性の言葉は女性への暗示となり体もそのままに反応して
ゆくものです。

しかしそれは、あくまで女性を導くための愛撫であるのです。
愛撫ではなく愛無にならないように注意が必要です。

その3 進化へのススメ

わたしたちは愛という言葉をよく使っております

太古の言葉ではアは神様イは人のことを言うものです

アイとは神様と人がひとつになった状態をいうのです

感情想念の好きという感覚が愛なのではありません

愛する方と真にひとつ（アイ）になれたか否かを決めるのは自分で
はありません、

人に出ることはそこに向かう努力を積み重ねてゆくことなのです。

そもそも愛しているという心の感触は錯覚にしかすぎません

なぜなら人は皆お互いを愛し結ばれるのでしょうか、年月の
たつ間にその気持ちは変化してしまうものだからです。

真のアイは進化してゆくものなのです。

人の心は動かそうと思つて容易に動かせるものではありません
空腹のときに満たされているといくら思つてみても満たされないよ
うに

愛したいから愛せるといふものではありません。

嫌いな人にも尽くせなければどんなに好きな人へも尽くすことはで
きないものなのです。

アイにいたるには限りない努力が必要だということなのです。

女性が無限に男性の上でオーガズムを感じてゆき、男性が女性を無
限にオーガズムに運んでゆきますと、お互いを慈しみ尊ぶ心が自ず
と生れてくることでしょう。

相手によるのではなく自分自身がいかにあるかによるのです、です
から始めは心と体を作る練習だと思つてしてみることでしよう。

パートナーとの契りが週に一度なら他の日は蓄ひらき、太刀磨きで
練習をするのです

繰り返しの回数、長い時間を努力した方が結果が違ふのは言うまで
ありません。

一朝一日にはアステイは開かないのです。

パートナーへの思いが真のアイに生れかわることもごく自然な運び
でなければならぬものです。

アステイがひらいたなら女性は男性とひとつになつてわずか数秒で
オーガズムに達するようにもなつてまいります

そうして一度いき二度三度とオーガズムを迎えることにその強さ深
さは増してゆきます。

女性の全身は赤く染まり大粒の汗のしずくが滴り落ち、意識も遠の
くほどに感じてゆきます、それでも恐れずにさらにオーガズムに達
して超えてゆくのです。

女性はもうこの男性なくして生きることできないような心地に誘
われてゆくことでしよう。

男性はその女性が心底愛おしくなり、その女性の願いが自らの願い

となつてゆくことでありましょう。

男性は女性がオーガズムに達したならその都度に褒めてあげること
も大切なのです

女性はあまりに深いオーガズムを感じてゆくとやがて怖くなるもの
です、

その時に男性の褒める言葉が支えになることでしょう。

女性はオーガズムに達することを恐れてはなりません

果てしなく果てしなく超えてゆくのです

やがて女性は自分の体なのか心なのか何なのかわからなくなつてゆ
きます

まったく別の世界に存在しているような感覚を憶えてゆくのです

それは宇宙^{ソラ}への回帰

イノチのフルマイ

アステイへの回帰現象なのです

ヒトはやがてすべてのみなもとである大宇宙のど真ん中のアステイ
にひとつになるのです

そこからすべてが変わつてゆくことになるのでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7016g/>

オーガズムは進化する

2010年10月22日00時44分発行